

中央区・東区の大極殿・朝堂院地区の 明治時代の図面

小字ごとに記した字限図を合成したもの。北は通称一条通から、南は朝堂院まで。黄土色は田、黄色は畦、青は畑・芝地・林。建物基壇の芝地をはじめ、区画・段差など、古代の遺構を明瞭に読み取ることができる。元写真は冊子、合成写真。

本文32頁参照（撮影：鎌倉 綾 合成：中村一郎）



宇治の文化的景観における 伝統的家屋調査（宇治橋通り）

宇治に残る各伝統的家屋は、重層的に形成された宇治の都市構造、そこで育まれてきた茶業を中心とする生業と有機的な関連性で結ばれ、「宇治の文化的景観」の核をなす要素である。中近世に茶師屋敷が建ち並んだ宇治橋通りでは、当時の地割や土地利用が近代以降の茶関連家屋や商業施設の形状に影響を与えながら、現在も人々の営みが続けられている。本文42頁参照（撮影：杉本幹夫）





遺跡出土の貝釦製作残滓

平城京右京一条三坊一坪の発掘調査において、近現代の大土坑から多量の貝釦製作残滓が出土し、分析を環境考古学研究室がおこなった。

貝釦素材となった貝種は日本には生息せず、主に中国に分布する種であった。中国の淡水域で採集され、日本に持ち込まれたものと考えられる。貝釦の素材獲得や製作技術を検討できる資料として、また奈良における地場産業の歴史を考える上でも貴重な資料である。

本文72頁参照（撮影：牛嶋 茂）

奈良県近代和風建築総合調査

（奈良県立畝傍高校本館）

相輪を備えた塔屋をもつ畝傍高校本館は、近代奈良の建築家である岩崎平太郎の設計である。岩崎は京都で古社寺修理に携わり、近代和風建築の大家である武田五一のもとで腕を磨いたのち、奈良県内に数多くの作品を残した。奈良県に残る明治から昭和初期に建てられた和風建築は、古社寺修理の経験をもとに、伝統的な造形・技術を近代建築へと昇華させたところに特色がある。

本文36頁参照（撮影：杉本和樹）





藤原宮朝堂院回廊・大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第160次調査）

大極殿院回廊東南隅を推定位置で検出した。礎石据付掘方や基壇外装抜取溝が良好に遺存し、大極殿院回廊と朝堂院回廊が同規模の複廊であったことを確認した。画面中央が南面回廊SC9000、右が朝堂院朝庭SH10800。西から。

本文80頁参照（撮影：井上直夫）



南北大溝SD10801Bと

東西大溝SD10881

藤原宮の造営過程に関わる遺構の追究のため、広場部分の一部につき下層調査を実施した。第153次調査で確認した斜行溝SD10801Bの延長部を検出し、これが東西大溝SD10881に付け替えられた事実が判明した。南から。

本文80頁参照（撮影：岡田 愛）



甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第157次調査）

2008年度からの継続調査である。第146次調査で検出した石垣の延長、および遺跡東半の土地利用の状況の確認を主要な目的として調査を実施した。石垣SX100は鍵手状に折れ曲がる複雑なものであることが判明し、7世紀中頃に石垣を谷と共に埋め立てた後の継続的な土地利用の様子があきらかになった。写真上は調査区全景（北から）、写真左下は石垣SX100（南から）。

本文92頁参照（撮影：井上直夫・岡田 愛）



土坑SK184出土土器

調査区北部で検出した土坑からは、完形土器49点を含む104点の土師器・須恵器が出土した。7世紀中頃の良好な一括資料である。本文92頁参照（撮影：井上直夫）



檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第159次調査）

檜隈寺講堂跡の北西側で、石組のL字形カマドを持つ竪穴建物SB910を確認した。カマドの西袖は地山を掘り残して構築される。焚口には丸瓦が立っていて、その前面に焼土、背面に炭が残る。カマドと並ぶように柵状施設も確認された。北西から。

本文112頁参照（撮影：井上直夫）



竪穴建物SB910出土素弁八弁蓮華文軒丸瓦

瓦当裏面に格子叩きが認められる軒丸瓦で、SB910出土の瓦にはいずれもこのような格子叩きが施される。格子叩きの瓦は檜隈寺の主要伽藍所用瓦にはみられず、以前より存在が想定される檜隈寺の前身建物に用いられた瓦と考えられる。

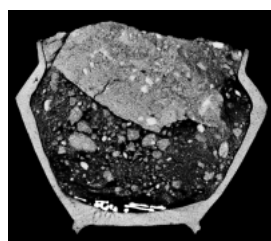
本文112頁参照（撮影：井上直夫）



興福寺南大門の調査（平城第458次調査）

平城第458次調査は、興福寺南大門の全面的な発掘調査である。調査の結果、基壇は東北～東南部および西北部が近代に削平を受けていると判明したが、基壇上面では礎石や金剛力士像の基礎を検出した。また、基壇中央部では創建時鎮壇具の発見があった。北西から。

本文154頁参照（撮影：牛嶋 茂）



鎮壇具容器（須恵器広口壺）のX線CT画像

SX9361から出土した須恵器広口壺には、密度の異なる3層の土が詰まっていた。壺の底部付近で黒色に写る部分が有機物を多く含む砂（3層）で、白色に写る銭貨とガラス小玉とはその下位にある。本文154頁参照

南大門の基壇版築層

断削調査の結果、南大門の基壇は大規模な整地作業で谷を埋めたうえで掘込地業をおこない、丁寧な版築工法で築成したものと判明した。写真の左端には南階段SX9405の積土が写る。南から。

本文154頁参照（撮影：牛嶋 茂）



薬師寺東院の基壇建物版築（平成第457次調査）
現東院堂の北および東に設けたトレンチ調査で確認した。掘込地業の底面に小石敷を施し、厚さ5cm前後の版築を少なくとも1.4m積み上げる。壁面に見えるのは原位位置を保つ礎石の根石。西から。

本文146頁参照（撮影：牛嶋 茂）



薬師寺東院堂東方の調査区全景

東院堂東方に設定した幅1.5m、南北延長約45mの調査区。手前の落ちが、今回発見した基壇建物の南辺にあたり、近世の大土坑で大きく削平を受けている。南端付近では近世の池の堤状遺構を確認した。北から。

本文146頁参照（撮影：牛嶋 茂）



右京三条一坊八坪の調査（平城第448次調査）

調査区の中央部には近代の池が広がっており、奈良時代の遺構面は調査区東側および北側にわずかに残るのみである。そのうち、調査区東側では基壇建物らしき痕跡を確認することができた。西から。

本文168頁参照（撮影：牛嶋 茂）



第一次大極殿院広場の調査（平城第454次調査）

内庭広場東南隅部の調査。奈良時代前半の礎敷広場の3回におよぶ変遷と、大極殿院内の排水に関わる東西溝SD5590を確認した。また、調査区中央部では巨大な矩形の土坑を検出した。西から。

本文138頁参照（撮影：中村一郎）